春雨の日に箱根まで（島崎藤村君を送る）

田 山 花 袋

—

川崎で中澤君も下りた。『君の社はこの近所ですか』島崎君は窓の所に行ってこんなことを言った。外には雨が降っていた。

中澤君は汽車の出るまで其処に立って此方を見送っていた。やがて席に戻って来た島崎君は、『段々こうして送られて別れて行くのは淋しいもんですね』こう言って荷物の上に載せてあった一個の紙包みを取って、そして私の傍に腰をかけた。そこにはロマン、ロウラン¹の作が三冊入っていた。中澤君が今朝饞別に呉れたのだなどと島崎君は私に話した。

向うに行ってからの話を私達は絶えず繰返していた。『彼方に行って、先ず最初に腰を落着けようとするところは、東京なら、湯島のようなところで、学生だの若い人達の多いところだそうです。イタリイあたりから、修業に来ているお医者なども居るような所だそうです。』島崎君はこう言って、これから始めようとする新しい生活を頭に浮べるような顔色をして、静かに巻煙草を吸った。『ホームシック、そうですね、さびしいでしょうね』などとも言った。

私達はドオデエの話だの、ゾラの話だの、フロオベルの話だのをした。シャンプロゼイの森や、メダンヤ、ルーアンなどが私の頭を往ったり来たりした。セナールの森の中の廃れた寺院はもう残っていないだろうか。鳶の絡んだ古いその寺の窓は残っていないだろうか。メダンの邸宅の二階の一間で、客を謝して専念にペンに親んだゾラのことだの、セイネの見える一間に当年の文星を集めたフロオベルのことなども私達の話頭に上った。『そういう人達の痕跡^{あと}をたづねて歩くだけでも意味のあることですね。…成^{なる}たけ、そういう所も見たいと思っています。『ホワ`リー夫人』のモデルになった婦人の墓、そうそう、そういうこともありましたね。あれなども面白いね、行って見ると…』こんな話から続いて、行った当座は、まア、様子が解らないから巴里にいるが、その中好い所をさがして田舎に住んで見るつもりだなどという話も出た。

島崎君には、洋服がよく似合っていた。年も三つや四つ若く見えた。旅行用の新しい鞆、そこから、島崎君は饞別に貰ったトルコ煙草を出して、そしてそれを私に勧めた。

相模と武蔵との間に連っている低い松の多い山には、雲が懸ったり晴れたりしていた。梅の白く咲いたのが其処にも此処にも見えた。鶴見の停車場では、見送りに出ている人がある筈だと言って、島崎君は窓から首を出していたが、時間でも間違えたのか、その

¹ ロマン・ロラン…フランスの作家。

人の姿は汽車の出るまで遂に見えなかった。神奈川あたりから雨は強く降り出して来た。
『こういう雨の日に、君を送って行くというのも記念になって好いね。』

こう私は言った。

『そうですね。静かで、心持が落ち着いていて、感じが好いですね』島崎君はこう言って、
縞のように雨の降っている外を見た。

二

横浜からは夫婦づれの西洋人が乗った。鞆だの包だのを沢山持っていた。細君の方は
丈の^{せい}高い女だった。

島崎君はじっと見ていたが、『ドイツ人でしょうか、イギリス人でしょうか。余り金持
の西洋人じゃありませんね。』

『そうですね。』と私は言って、『矢張、向うに行くとなると、外国を旅行している西洋
人が眼につくと見えますね…。他人ごとではないような気がすると見えますね。』

『そうだね。』

こう言って島崎君は笑った。

言葉の通じない知らない国を一人でさびしく旅行して行く友達の身の上を私は思わな
い訳には行かなかった。『神戸から船に乗ったら、すぐ外国に行ったような気になろうと
思って、わざとフランスのメールにしたんですがね。初めは、屹度困るでしょうけれど
…』先程船の話が出た時、こう島崎君の言ったのを私は思い出していた。

程ヶ谷を少し行った所の左側の小さな祠には、野椿の一杯に咲いたのが印象派の絵で
も見るように明るく雨の降^{ふり}頻る中に見えていた。五月頃にはいつも一八の綺麗に咲いて
いる境木村茅草屋根、それもやがて掠めるようにして通って行った。並んで腰をかけた、
私達は段々沈黙に陥^{おち}ちて行った。私の眼の前には、何遍となく通って行ったその折々の
さまが一つ一つ絵巻物のようになって見えていた。

汽車の煙は低く雨に沈んで、青い麦畑の上を靡^{なび}いていた。

大船で下りると、神津君が迎えに来ていた。長い橋を渡って横須賀線に乗替えてから、
『本当に急な思い立ちでしたね。初めて新聞で見た時には本当だとは思いませんでした
よ。お子さん達は？…そうですか、それはまア安心ですけど、お目出度いって言って
好いかわるいか解らないような旅行ですね』こう言って少^{しばし}時途切れて、『しかし、まア結
構です。達者で行っていらっしゃるんですね。』

三

神津君の家は、八幡の華表^{とりだい}から左に入った静かな所にあった。森や、檜や、野椿の花
を背景にしたような家の構えで、傍に、低い垣を取回した庭があった。庭には、椿だの
四季咲きの躑躅だのが植えてあった。明るい座敷の硝子障子から散過ぎた梅の花が見え

ていた。

神津君の信濃の家に、矢張り、島崎君と二人で訪ねて行ったのは、それは明治三十九年の十二月であった。山と山とを間に分けて入って行くようなところにその家があった。朝、起きると、庭の紅葉が眼もさめるように紅くなっていた。その書斎からは、蓼科や和田峠を越して日本アルプスの晴雪がキラキラと日に輝いで見えた。そしてその翌日は皆なして、追分の古駅を見に行った…。時はいろいろなシーンを私達の前に広げて見せた。鎌倉の静かな春雨の日に、こうして、またこの三人が一緒に集って昔話をすることは一その一人のフランスに行くのを送るということはまことに意味の深いことである。玄関の三畳の高窓に島崎君が洋服姿で腰をかけて、その傍に、シタミに寄りかかって神津君が立って、その左のぬれ縁に私が居て、そして、庭で、黒い布を被って、光線の度合いをはかっている田舎の写真師の旧式の写真機の前に立っているということは、意味の深い一場の光景である。この光景は、三人の一生の絵巻物に屹度鮮かなハッキリしたシーンをつくって、永く永く残って行くに相違ないのである。私はこんなことを思って、写真の済んだ後を長い間そのぬれ縁に立っていた。

玄関の三畳には、新しい鞆と、新しい帽子と、新しい外套と、新しい細い蝙蝠傘とが置いてあった。外では、雨が降ったり止んだりしていた。

『ここでは、波の音はちっとも聞えませんね。』

私はこんなことを言って、松山の向うの海を想像した。

光線の少し暗い八畳の間、其処で、私達は^{ひるめし}午飯のちゃぶ台に向った。長火鉢に向い合って神津君と私とが坐った。ビールを飲んだり日本酒を飲んだりしながら、神津君は国の細君の許に絵葉書を書いたりした。『千曲川のスケッチ』のトビラには、島崎君が伊勢物語にある歌を万年筆で書いた。—春雨はいたくなふりそ旅人の道行衣ぬれもこそすれ—『此の歌は今日の私の心持をすっかり言って呉れたようなものです』こう言って島崎君は笑った。島崎君はこの歌が好きで、よくあちこちで書いた。中でも、私はある綺麗な銀梨地の舞扇に小さくこの歌を書いたのを知っている。その扇を持った^ま妓は、踊の上手なのでその土地にも聞えていた。

その一間にはやがて人々が訪ねて来た。円覚寺の敬親という若い和尚さんなども来た。小諸で先生に教わらなかったけれどよく知っていたというような神津君の親戚に当る若い人なども来た。私達は静かに話したり飲んだりした。

私達はやがて今日のこの静かな一夜をいかに過すべきかを話し始めた。『此処でよろしくば、私の家にお泊りなさいませんか』こう神津君は言った。しかし奥さんもないのに、お世話になるのも気の毒だ。何処か好いところはないだろうか。この鎌倉にないだろうか。私達はこう言って、あれかこれかと探した。しかしちょっと好い所は見当らなかった。—そうかと言って、江の島もつまらない、鶴沼も面白くない…。『それじゃ国府津で一晩泊って行きましょうか』島崎君はこう言って、『それに、茅ヶ崎で、時間を知らせ

で逢って行きたい人がありますから。』

『国府津で泊るなら、箱根まで行く方が好いですね。』

私はこう言った。

神津君も賛成した。小諸から来た若い人も一緒に行くことになった。

四

茅ヶ崎で、島崎君が逢って行きたいと言った婦人は、矢張小諸の生れで、前から来て南湖に病を養っていた。『是非、ちょっと窓からでも好いからお目にかかりたい。時間を知らせて下さい』こう言って来ていた。

もう、しかし、電報で知らせてやって、そして向うから出て来るというようなそういう時間はなかった。島崎君は電報用紙に宛名を書きかけて止した。『早かったら、私だけ寄って行っても好う御座んす』こう言ったが、それも汽車の都合で出来なかった。

そればかりではなかった。一時、晴れ模様になった雨は、大船あたりからまた盛に降り出した。吹かける雨は珠となって窓から滴り落ちた。麦畑、松林、砂山、桃林、小さな停車場—そういう中を汽車は音を立てて進んで行った。鼠色をした汽車の煙は、ちぎった古綿のように、ポツポツと畠の中に落ちた。茅ヶ崎あたりを通る時は、殊に雨が強かった。それに、もう四辺は少し暗くなりかけていた。

独歩を火葬した六本松あたりは雲と雨とに包まれて唯微かに見えているばかりであった。私は六年前の其頃を想像した。南湖院の一室、松林の中の鞆、砂の多い田舎道、其処にはポプラに囲まれた小学校があったり、ひらいた鱈の干物の一面に干してある漁師の家があったりした筈だ。桃の紅く咲いている坂道からは海が遠く見えた筈だ。私は中澤君と独歩との交りなどを頭に浮べていた。

汽車が茅ヶ崎を通る時、島崎君は立って窓をあけて外を見た。『そういう人に逢って行くのも意味があると思ひましてね』先程こう言った言葉をこの時私は思出していた。島崎君は長い間、松原と雨と畠とを見ていたが、やがて思い切ったように窓をしめた。私達は皆な黙っていた。

『気の毒ですね、ああいう人は—』暫くしてから、島崎君は神津君に言った。

『しかしもう、大変好いんです、此頃は。』

こう神津君が言った。

五

島崎君に取っては、国府津は追憶の多いところであった。『春』にも、そのシーンを出ている。『春』を書く時に来て滞在していたという旅舎もある。毎日此処から出て熱海、伊東の方に行く小さな汽船のことは、それは『家』の中にある。波の高い中に絶えず動揺しているペンキ塗の白い青い小さな汽船—。

蜜柑の植えられてある小さな谷はやがて私達の前にひらけて来た。松や人家や寺の門の上に海はひろく広げられて見えた。『春』に書いてある東海道を歩いた話が出ると、『馬鹿なことをしたもんですな、若いということは面白いもんですな』などと言って島崎君は笑った。『そうです、透谷がいた時分にはよく来ました』若い人の間に答えて、続いていろいろその時分の話が出た。

国府津に着いたのは、もう五時過ぎであった。あたりは稍々暗くなりかけていた。灯をつけた家などもチラチラ見えた。海は荒れていると見えて、波の音が凄じく聞えて来た。松も鳴っていた。

電車の一等室はやがて私達四人を居れた。酒匂橋を渡る頃には、もう日は全く暮て、明るい電気の灯が車内を照した。島崎君は疲れたというように、向うの隅に体を寄せて眼を閉じていた。山近くなった故か、寒気がこの頃にはめづらしいほど身に迫って来た。

小田原の町はチラチラする灯の中に過ぎた。気が付くと、電車はもう本社前を通りすぎて、町の大通を走っていた。車掌のベルを引く音が絶えず頭に響いた。人々は皆な話し疲れたというようにして黙っていた。

私は頭に今朝の新橋の停車場を描いていた。二等待合室の前のところには、島崎君を取巻いて文壇の多くの人達が集っていた。中には、島崎君の作物だけを知っているというような青年も来ていた。私はこれまでに、ずいぶん多くの人々の出発を此処に送った。停車場が一杯になって了うよおうな盛んな送別を見たこともあった。しかし島崎君を送ったような真面目な送別が今までにあったらどうか。汽車が立つ時にも、平凡な漫才などを唱えるものもなく一唱え出そうとするものもなく、静かに、真面目に、窓に半身を現わした島崎君を送った…。平民的でそして貴族的。こう上司君が『読売』紙上に書いたが、実際そうだった。

灯の町を離れると、やがて山の黒い影が闇の中に見え出して来た。早川の水の音が静かに淙々と聞えて来た。

『寒いすな。』『山ですな、矢張一』

こんなことを互に言い交していたが、風祭を過ぎた頃、窓から首を出した神津君は、『雪が降ってるんですね』こう驚いたように言った。

私達は皆な窓の外を闇にすかすようにして見た。島崎君も窓を明けて見た。成程、畠が薄すらと雪に覆われているのが夜目にもそれとわかる。『今は、雨のようですけど、先程余程降ったんですね』手を窓の外に出した神津君は言った。

電車から降りて見ると、成程、路は雪汁になっていた。家々の灯の明るい中に、水の音は滝津瀬のように聞えている。靴を穿いた島崎君だけを車に託して、私等三人は暗い闇の中を歩くことにした。私等は橋を渡ったり、溪流の白く見える崖に添った路を歩いたりして、段々その温泉場へと近寄って行った。明るい温泉場へ、しめやかに別れを惜しもうとする山の湯の宿へー。

※本文の表記は、新漢字・新かな遣いに改めた。
※明らかに誤字脱字が認められた箇所は直している。
※出典「太陽 19 卷 6 号」大正 2 年 5 月 1 日